

春夏秋冬そして春

2004(平成16)年11月23日鑑賞(OS劇場C・A・P)

★★★★



監督・脚本=キム・ギドク/出演=オ・ヨンス/キム・ジョンホ/ソ・ジェギョン/キム・ヨンミン/キム・ギドク/ハ・ヨジン/キム・ジョンヨン (エスピーオー配給/2003年ドイツ・韓国合作映画/102分)

……評判となっていたキム・ギドク監督の作品をやっと観ることができて大感激！ 美しい山間の湖に浮かぶ小さな庵を舞台に展開される人生模様は、考えさせられるところ大。韓国にこんな監督がいたのかと目を開かされた思い。『オールド・ボーイ』(03年)をおしのけて韓国で最も権威ある「大鐘賞」を獲得したのもよくわかる。見逃していた同監督の話題作『悪い男』(02年)も何とか観なければ……。

キム・ギドク監督とは？

この映画を観てパンフレットを詳しく読むまで、私はキム・ギドク監督のことは全く知らなかった。ただ、近時の話題作『悪い男』(02年)の監督で、かなり異端児的な人物というイメージを持っていただけ。

映画鑑賞後パンフレットを読んで、私のその印象が正しかった(?)ことがよくわかった。そう、このキム・ギドク監督は、1996年に『ワニ』でデビューして以来、9年間で11本の映画を撮り続けてきた精力的な監督だが、海外では高く評価されても韓国内ではあまり評価されず、「嫉妬される異端児」とされていたとのこと。

それは、彼の作品には「ヤクザ」「売春婦」「犯罪者」などが主人公として登場するため、「反社会的」と批判されることが多かったから。そしてまた、彼の作品のそのような傾向は、彼が韓国の義務教育である小学校しか卒業していないため、日本以上の学歴重視社会の韓国では、そんな低学歴であるにもかかわらず国

外で高く評価されることに対する嫉妬が満ちあふれていたというわけだ。

そしてこの映画は、キム・ギドク監督作品の日本公開第3作目とのこと。その1作目は『魚と寝る女』(99年)。そして2作目が、ヤクザが女子大生を騙して娼婦に仕立て上げていくという、ものすごいストーリーの『悪い男』(02年)。この『悪い男』は、絶対観なければと思っていながら上映期間が終わってしまい見逃していたが、近いうちに是非観なければ……。

この作品はキム・ギドク監督の異色作

キム・ギドク監督の第11作目、日本公開第3作目となるこの『春夏秋冬そして春』は、前述のヤクザ・暴力・犯罪・売春などという反社会的イメージはほとんど登場せず、逆に仏教を基礎とした人間の業のようなものが美しい山間の湖に浮かぶ庵を舞台に描かれている。登場人物も少なくセリフもきわめて少ないうえ、流れる音楽も静かでスローなもの。まさにタイトルどおり、春夏秋冬という4つの季節の中で、主人公の一生が①子供(春)②少年(夏)③青年(秋)④中年(冬)と、章ごとに分かれて描かれていく。

そして年老いた主人公が、自分の生まれ変わりのような子供を庵に迎え入れ、再び春を迎えたところで映画は終わる。

このように、この作品では10作目までのキム・ギドク監督の特徴が姿を消したため、韓国内では、「偽善的」、あるいは「仏教をよく知らない欧米人をよくわかった気にさせる海外受けを狙った作品」という批判を受けたらしい。これは私流に言えば、キム・ギドク監督はどんな映画を作っても賛否両論の議論を巻き起こし注目されるということであり、実にすばらしいことだ。

四季おりおりに美しい湖中の庵は？

映画全編を通じて舞台となるのは、四季おりおりの美しさを見せる湖中の庵。パンフレットによれば、これは慶尚北道青松郡にある周王山国立公園の注山池とのこと。キム・ギドク監督が半年間にわたって交渉した結果、原状回復を条件にこの池での撮影が許可されたとのこと。いちいちボートに乗って対岸まで行かなければならないのは不便、などと思うのは大きな考え違い！ 1人静かに山の中

の庵で修行しながら過ごすのが僧の仕事(?)だから、そんな便利さは不要であり、日々の営みさえできればよいというものだ。

「春の章」——解釈はいろいろだろうが……？

主人公が心の中に大きな石を抱えることになったのは、天真爛漫な少年時代のちょっとした悪戯から。最初の「春の章」における主人公は幼子。この幼子の悪戯とは、小魚、蛙、蛇にそれぞれ石をくくりつけて遊んだこと。考えてみればこれはすごく残酷な行為だが、子供心にはそれがなかなかわからなかったらしい。しかし老僧はこれを厳しくとがめ、「3匹のうち、1匹でも命がなかったなら、お前は心の中に石を抱えて生涯を生きるだろう」と予言した。そしてこの主人公の一生はこの予言どおりに……。 「春の章」では素朴なシーンがたくさんあるものの、実はこの幼子の悪戯がその後展開する物語を支配するモチーフとなるのだから、よく考えればかなり意味シ……。

こんな基本的なストーリーについて、宗教専門家たちは「輪廻の思想」とか「人間の無常」とかいろいろ言うだろうが、私はそういうテーマにはあまり興味はない。私がビックリしたのは、こんな基本ストーリーを設定したうえで、1人の人間の一生を「春夏秋冬」という4つの章と「そして春」という1つのエピソードに見事にまとめあげたこと。この映画を観れば、仏教の素養などなくても、誰もが深く考えさせられることまちがいなしだ！

「夏の章」は？

「夏の章」が印象深いのは、景色もさることながら、「夏の章」にはじめて登場する女性のため……。これはスケベ親父の習性か……？

夏の庵を母と少女の2人が訪れてきたのは、少女(ハ・ヨジン)の養生のため。そしてこの時主人公は17歳となっていた。精神的な病を持ったこの美しい少女も同じような年頃。話を交わすことはまれであっても、17歳の少年の異性に対する興味と欲望は容易に押えることができず、結局2人は結ばれることに……。これらの描写は、さすが「異端児」と称されるキム・ギドク監督らしく、かなり「過激」。しかし美しい山の中の自然の石の上で結ばれたり、ボートの上で裸の身体

を寄せ合ったり、そりゃ美しいシーンの連続！ このような男女の激情は通常なら決して反社会的なものではないものだが、このような行為がお寺の領域で許されるはずはない。したがって結果的には、この男女の性愛の描写はこの映画ではやはり反社会的……？

「秋の章」は？

「秋の章」は超現実的なもの。すなわち「秋の章」のスタートは、2人して庵を出奔した主人公が、キラキラと目を光らせ、ギスギスした様子で庵に戻ってくるシーンから。彼は、自分を裏切り、別の男のもとに走っていったあの少女を殺し、今は警察に追われる身になっていたのだった。

こんな主人公に対する老僧の対応は、「さすが」と感心させられる立派な修行僧のもの。そして主人公を心静かにさせて警察に引渡した後、死期を悟った老僧のとった行動は……？

「冬の章」には監督自身が出演し、すごい肉体美を……

四季の中でも私が特に印象深いのは冬。とりわけ「冬の章」における雪と氷で覆われた湖の美しさや山々の美しさは絶品モノ。そしてこの「冬の章」に登場する中年の僧はキム・ギドク監督その人。刑期を終えて今は廃墟となった庵に戻ってきた主人公は、仏像を彫る一方、肉体を鍛練することによって心の平穏を得ようとする。上半身裸となって見事な武術の型を見せるのは、キム・ギドク監督その人。彼は1960年生まれだから44歳のはずだが、その肉体のしなやかさと躍動美は男の私が見ていてもホレボレするほど見事なもの。やはり一芸に秀でた人間は、何事も一流になるものだと感心！ そしてこの章では、ある1つの悲しい物語も展開されていく。

キリスト教、儒教、そして仏教

韓国ではキリスト教信者が多い。パンフレットによると、キリスト教信者が4分の1で、仏教徒が4分の1とのこと。また宗教としての儒教を信じている人は1%にすぎないが、儒教的価値観は今でも多くの韓国人が持っているもの。これ

ぐらいの知識は私も持っていたが、パンフレットにある小倉紀藏氏の「美しい無の山奥に」は、「キリスト教と儒教は主に都市での世界観であるのに対し、仏教は人里を離れた山奥の世界観」と分析している。そこに書かれた解説は非常に面白く、また勉強になるもの。儒教が支配的イデオロギーとなった朝鮮王朝時代(1392~1910) 仏教は厳しく排斥され、寺は山奥に追いやられた。そのため、韓国のお寺は山の奥にあるというわけだ。

宗教観の希薄な日本人は、容易にキリスト教やイスラム教的価値観の理解ができないのと同様、韓国におけるこんな宗教状況もわからない人が多いが、少なくともこのパンフレットに書いてあることくらいは勉強することが必要だ。そうでなければ、なぜこんな山の中の湖の上にお寺(庵)が存在しているのか自体がわからないことになるから。

2004(平成16)年11月24日記

ミニコラム

「ヨン様」ばかりが韓流じゃない！

日本中を席卷している韓流ブームは収まるどころか、『冬ソナ』の舞台へひとつ飛びとなる関空=春川直行便の新設によってさらに加速されることは明らか。聞くところによれば、紅白へのヨン様の出演に固執したNHKは、2千万円を提示したがフラレたらしい。「ええ加減にせえ！」

もっとも、この『冬ソナ』も実際に観ると結構ハマるし、美しい音楽は絶品！しかし私が日本のオバさま族に強調したいのは、すばらしい韓流映画は他にもたくさんあるということ。

今年47回目を迎えた「朝日ベストテン映画祭」が選んだ外国映画の第1位

は『オアシス』で、第3位が『殺人の追憶』。この他にも『ブラザーフード』や『オールドボーイ』そしてこの『春夏秋冬そして春』など、韓国映画のお薦め作はいっぱいある。『僕の彼女を紹介します』も、観客席のあちこちからすすり泣きの声が聞こえてくる感動作だった。

いい加減に「ヨン様離れ」をして、もっと広い視野で韓国映画を観れば、そのすばらしさは一層広がるはず。『春夏秋冬そして春』で披露した俳優としてのキム・ギドクの「肉体美」をみれば、その魅力はヨン様の比ではないと思うのだが……。